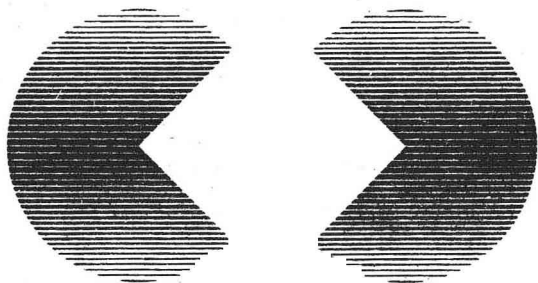


日本人と話しことば

NHKことば調査グループ 編

日本人と話しことば

NHKことば調査グループ編



はじめに

この本は、NHKの総合放送文化研究所と放送世論調査所が実施した「日本人のことばに関する意識」調査のデータをもとにして、日本人の話しことばの現状はどうか、話しことばについての人びとの考え方はどんなふうかなど、話しことばについての日本人の意識をさまざまな視点から浮き彫りにしようとしたものです。

放送、という仕事は、ことばをぬきにしては考えられません。それも、中心になるのは話しことばです。放送番組は、話しことばによって語られ、視聴者に伝達され理解される、という形式をとっています。

わたしたちは、放送開始以来、放送での話しことばについてたえず調査研究をつづけてきました。放送のことばがどうあったら視聴者に正しく、感じよく聞いてもらえるか、しかも視聴者への訴求効果のたかい、魅力的な言語表現たりうるか、を追い求めてきました。

今回の「日本人のことばに関する意識」調査もそのひとつです。

これは、日本人のことばづかいの現状、ことばについての考え方を知り、これを毎日の放送のうえに役立てようとする目的で行いました。

放送のことは、現代の日本人の言語生活のなかにはぐくまれるものです。人びとのことばづかいの実態、ことばへの意識を、すなおに受けとめ、そこから、もういちど、放送のことばに磨きをかけていこうというわけです。

いま、多くの人びとがことばに関心をもっています。五年まえのNHK調査によりますと、「ことばづかいがもっと上手になりたい」と願っているひとが七五パーセントもいました。「健康」への関心に次いで二位です。ほかに、「つきあいや交渉がうまくになりたい」という人、「ことばで気持ちをあらわすことの上達をねがう」人もすいぶん多く、この現代という時代は、ことばに無関心ではいられない時代といっているように思います。

わたしどもの今回のことばに関する調査研究は、テレビ・ラジオを通じ、あるいは各種の報告を通じて、皆様に知っていただくように心がけてまいりましたが、ここに一冊の本にまとめて、お読みいただくことにしたいです。

とくに、今回の調査は、その過程で、外部の十人の学識者の皆さんの協力をえて、数次にわたる研究会をひらきました。ここに厚く御礼申し上げるしだいです。

NHK総合放送文化研究所長

黒野 郷 八 郎

日本人と話しことば・目次

はじめに……1

NHK総合放送文化研究所長 黒野郷八郎

「日本人と話しことば」の調査と研究——司会にあたって……9 米田 武

日本語は乱れているか……15

“乱れ”の意識……17 報告 石野 博史

“乱れ”の現状と将来……33 座談会 大石初太郎

深尾 凱子

現代人のおしゃべり……71

早口・饒舌・冗談好きな日本人……73 報告 稲垣 文男

都会のおしゃべり・農村のおしゃべり……89 座談会 外山滋比古

堀越 久甫

ことばづかいの感覚……119

ことばはタテマエ、態度にホンネ……121 報告 堤 轍郎

身内のことば・あいまいな心……138 座談会 青木 雨彦

木村 治美

話しことばの比較文化……………173

ことばと人間関係……………175

話しことばにみる東西文化の比較……………194

報告 相田 敏彦

座談会 築島 謙三

佐藤 毅

方言のゆくえ……………225

変わる方言意識……………227

日本語の豊かさを求めて……………247

報告 日高貢一郎

座談会 金田一春彦

川崎 洋

〈付〉「ことばに関する意識」調査・結果のあらまし……………277

I ことばについての感覚（録音テープ使用部分）……………278

II 流行語、外来語、敬語、方言の使われ方と意識……………281

III 家庭内のコミュニケーションの状況……………290

IV ことばと人間関係……………296

カバ
ー・装
幀
土
方
弘
克

日本人と話しことば

「日本人と話しことば」の調査と研究

——司会にあたって——

米 田 武

これまでも日本語に関する調査はいろいろ実施されていますが、全国規模のものは少なく、また、主として書きことばが中心で、話しことばの調査は少なかつたように思います。書きことばに比べて、話しことばには流動的な要素が多く、調査するにあたって基準のとり方がむずかしいことがその理由でしょう。

今回、わたしどもが、あえて「話しことば」の全国調査を試みましたが、戦後三十五年を経て、いま、日本人の話しことばの変化に一つの区切りが見られるのではないかと考えたからです。

今度の調査の輪郭は次のとおりです。

調査の対象は、全国の十六歳以上の国民、三千六百人です。面接調査法により実施しました。

調査内容としては、次の三つに主眼を置きました。

第一は、話しことばの現状と、それに関する人びとの意識、第二は、家庭内でのコミュニケーションの現状、そして第三は、ことばと人間関係です。

まず、第一の「話しことばの現状とそれに関する人びとの意識」ですが、いま、「日本語の乱れ」ということが言われています。その場合、具体的には、敬語の混乱、外来語・外国語の乱用、文法にはずれたことばづかい、くずれた発音やイントネーション、内容のない流行語のはらん、女性ことばの男性化などが指摘されています。

このような日本語の話しことばの現状をどうとらえるか。この問題を中心に、放送にとって重要な標準語と方言の問題などを加えたものを第一の柱としました。

問題の設定や質問の方法にも、話しことばの調査にふさわしいように——多分に実験的な試みなのですが——一部の設問にテープレコーダーを使用しました。

若者や女性の話し方、話しぶりについての感想や、ニュースを読む速さ、あるいは鼻濁音の有無による印象の違いなどを聞くには、どうしてもテープによる方法が必要だったのです。録音された音声をもとに、人びとの反応をとらえる調査方式は、集合調査や小規模な訪問調査では、実際に用いられた例はありますが、全国規模の訪問調査では今度が初めての試みです。全国各地で同じ種類のテープレコーダーを何百台もそろえることは簡単ではありません。んし、一般的な調査技法としても確立されておらず、むずかしい問題がいろいろありました。

が、結果的には一応の成果をあげることができたと思っています。

次に、第二の柱として、家庭内のコミュニケーションの問題に焦点を合わせました。

親子の断絶ということが言われますが、はたして家庭内での会話はどのように行われているか。その実態は言われるところの断絶を反映しているだろうか。また、最近の女権伸長と言いますか、そのような状況の下で、例えば、自分の夫を第三者に紹介するとき「主人」と言うことに抵抗を覚える妻が増えていると言われています。しかし、実際のところはどうか。こういった点を取り上げました。

第三の柱は、社会におけることばの位置づけの問題です。具体的には、日本人の性格とことば、あるいは日本の文化とことば、といったことがその内容です。

日本人は昔から何事にも控え目であることをよしとし、表面に出ることをきらう、そして、雄弁、多弁や論理的な議論は好まず、口数の少ない謙虚な態度を尊ぶ、と言われてきました。また、「うそも方便」とか「口はわざわいのもと」とかいいうことわざに代表されるように、ことばに対する信頼がいたって薄い。このほか、直接間接にことばにかかわるさまざまなことが、日本人の性格ないしものの考え方の特徴としてこれまで指摘されてきました。

しかし、最近は、こういった点にもなんらかの変化が起きているようにも感じられますが、実際のところはどのようなだろう、そこにあらわれた日本人の意識を探りたいと思ったわけです。

以上の三つの柱にしたがって全部で約四十の質問項目を作り、調査を行いました。その結果の概要は、本書の最後に付録として載せておきます。

さて、調査の結果をながめてみますと、数字そのものも、話しことばの今日的状況をそれなりに物語ってはくれます。しかし、今回の調査が、内容的にかなり広範囲にわたったため、数字だけではどうしても皮相的になりがちです。私たちは、調査結果の中からさらにテーマを絞り、考察を深める必要を感じました。そこで討論を重ねることにしました。

本書『日本人と話しことば』は、主として、先の第一の柱「話しことばの現状とそれに関する人びとの意識」および第三の柱「ことばと人間関係」を扱います。これをさらに五つのテーマに分け、それぞれ別のテーマごとに、まず調査分析にあたったNHK総合放送文化研究所と世論調査所の五人の所員が、問題点の整理と報告を行います。そのあと、学識者の方にお話し合いいただいて内容を深める、という形をとることにしました。

第一章は「日本語は乱れているか」というテーマです。

ここでは、女性語の問題、敬語の問題、外来語の問題などについて、その現状の解明と将来の展望を試みます。調査結果の報告をNHK総合放送文化研究所の石野博史、それをうけて、文教大学教授で話しことばや敬語の問題にくわしい国語学者の大石初太郎氏、読売新聞記者で『カタカナことば』の著者、海外取材の経験も豊富なジャーナリストの深尾凱子氏、このお二人に話し合っていたきます。

第二章は「現代人のおしゃべり」です。

ここでは、いまの日本人の日常会話の特徴は何かを考えます。いま、都市、農村を問わず、日本人は饒舌、早口、冗談好きになっているという調査データをもとに、総合放送文化研究所の稲垣文男（吉彦）がその実態を報告し、お茶の水大学教授で、ことばをいろいろな角度からとらえて論じておられる外山滋比古氏、もと『現代農業』編集長で長野県にお住まいの農村問題評論家、堀越久甫氏、このお二人にこの問題を掘り下げていただきます。

第三章は「ことばづかいの感覚」です。

ここでは、相手との関係やその場の雰囲気、相手への影響などに気を配りながら話す日本人の心情に関して、生活条件を異にする職業層によってどういう特色があるのか、相互にどういう関係があるか、などについて放送世論調査所の堤轍郎が報告し、元新聞記者で、いま評論・著作活動をされている青木雨彦氏、千葉工業大学教授でエッセイストの木村治美氏、お二人にご意見をうかがいたいと思います。

第四章は「話しことばの比較文化」です。

この章でも、日本人が、話し相手の違いにより、話し方に気をつかう、その心理を取り扱いますが、上下関係のことばづかいの配慮、自分の意見をあまり強く主張せず、まわりの人に合わせようとする傾向、未知の人に接するときのやや気詰まりな閉鎖的な態度、といったことが中心です。世論調査所の相田敏彦が報告し、前成城大学教授で、ことばの心理面に

くわしい築島謙三氏と、一橋大学教授でコミュニケーション論専攻の佐藤毅氏に話し合っていたきます。

最後の第五章は「方言のゆくえ」がテーマです。

ここでは、方言についての最近の人びとの意識の変化、方言と標準語の現状と将来などについて、もとNHK総合放送文化研究所員で、現在大分大学講師の日高貢一郎が報告、上智大学教授でNHK放送用語委員でもある国語学者の金田一春彦氏と、詩人で各地の方言の採集をなさっている川崎洋氏に、話し合いをしていただくことにしました。

各章を通して司会役は、私、米田武が担当します。日本人の話しことばについて、できるだけ多角的にとりあげていくつもりです。

では、まず、「日本語は乱れているか」のテーマから始めます。



日本語は乱れているか

報告

石野博史

座談会

大石初太郎

司会

深尾凱子
米田武